

続報 香雪美術館所蔵「帰来迎図」の修理



この修理は、三菱財団の
2019年度文化財修復事業助成金をつけて、
2020年9月の完成を目指して進めています。



修理中の「帰来迎図」 絵絹の裏が見えています。
重要美術品 南北朝時代 14世紀

1

昨年より修理を進めている「帰来迎図」。
絵の描かれている絹は、裏から何枚も
の裏打紙^{うらうちがみ}によって支えられています。
順に裏打紙^{はだうらがみ}をはずしていきます。

現在は、絵絹に直接触れている肌裏紙
の除去が終わり、絹地が露出する状態と
なりました。

この肌裏紙ですが、^す漉きムラのある紙が
使われていたので、細心の注意を払って
はがしていったとのこと。続いて過去の
修理で入れられていた補修絹も除去。



剥がし終わった裏打紙。左が肌裏紙です。
かなり濃い墨染めの紙が使われていました。

2

後世に手の入った部分が除かれ、
描かれた当初の姿がうかがい
しれる状態になりました。

こうなると、描いた絵師の息遣い
がより強く感じられるようになります。

例えば、透過赤外光で写真を撮影
すると、下描き線がくっきりと
見えます。なかなか闊達な墨線が
引かれており、何度も線を引き
直している部分や、仕上げの段階
で省略した箇所、形を変えた箇所
もあります。



透過赤外光写真
下描き線が現れます。

3

それから、裏彩色^{うらざいしき}。

絵絹の裏に彩色をする技法で、
表からの彩色とあわせて、
さまざまな表現ができます。
本作の裏彩色は、全面に絹目を
詰めるように白色を塗っていた
とみられます。

これがどのような効果を
生んでいたかは、
表の彩色をさらに
詳しく調べることで
明らかになっていきます。
続報をお待ちください。

